

第3部

職員派遣（令和6年7月25日からの大雨）

技術系職員

河川・砂防施設の災害復旧等

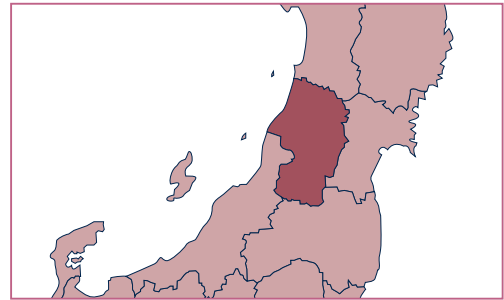
第3部 職員派遣（令和6年7月25日からの大雨）

河川・砂防施設の災害復旧等

山形県

最上総合支庁建設部河川砂防課

- 荒井 康太（建設局）
- 大内 武尊（建設局）
- 岡崎 智也（建設局）
- 奥平 周示（建設局）



荒井 康太（建設局／派遣期間：令和7年1月1日～令和7年1月31日）

派遣当初の状況

私は最上総合支庁建設部河川砂防課に配属され、山形県職員（山形県他庁舎からの派遣）3名、北海道職員1名、宮城県職員2名、東京都職員1名の構成の災害支援室で業務を行いました。着任時は、前任の派遣期間中に全ての災害査定が完了し復旧業務が軌道に乗り順調に進捗していたこともあり、職場の中に慌たしさはあまり無い状況でした。

派遣当初から庁舎のある新庄市や住居のある村山市ではとても降雪量が多く、至る所で雪が深く積もっている状況でした。まず始めに、被災箇所各地を車で巡りましたが、現場はどこも降り積もった雪で隠れており、被害状況を実際に確認できなかったところが大半でしたので、被災当時の写真により状況を把握しました。



【宿舍前の積雪状況】

派遣者自身が担当した業務概要

災害復旧事業の流れの内、私の担当業務は実施設計でした。実施設計とは災害査定の結果をもとに具体的な工事計画を立て、設計図書を作成する業務です。管内河川の堀内川、最上内川、檜原沢川の3河川を担当し、測量設計会社から提出された図面及び数量計算書のチェック及び積算を行いました。積算後は4名の山形県職員の照査者により内容のチェックを受け、指摘箇所の修正作業を繰り返し行い、設計書を作成しました。



【災害復旧事業の流れ】

河川・砂防施設の災害復旧等

業務の遂行に当たって、苦労したこと、工夫したこと

苦労した点としては、派遣元で担当しているような都市河川と異なり、自然と共存した河川の災害復旧のため、適用する設計基準が変わり、新たな基準を一から理解しなければならなかったことです。また、赴任当初は実施設計が初期段階であったことから、課内で実施設計における統一事項の改定が頻繁になされたこと、完成した災害復旧工事の設計図書がまだ無く、山形県外からの派遣職員にとって指標となるものが無かったこと、チェック者間で共通認識が取れておらず、人によって異なる指摘を受けたこと等に悩まされることがありました。加えて、初めて触る積算システムに苦戦もしましたが、災害支援室メンバーの方々からの親身なフォローのおかげで、最終的には担当河川のそれぞれで一通りの設計図書を作成することができました。応援職員として派遣されましたが、逆に勉強させていただいた部分が多くありました。

印象的なエピソード（うれしかったこと、やりがいを感じられたこと等）

エピソードとは少し異なりますが、災害復旧業務の経験が無かった私でも、1か月間の派遣期間を無事に成果を上げて終わられたことです。今回の被災地支援業務は入都後2年間の業務の中でも特に印象に残り、自信や成長に繋がったと感じる良い経験となりました。本当に自分などがお役に立てているのだろうか、経験の浅い自分が携わることは逆に迷惑になっているのではないかと、派遣中は少し不安感じておりましたが、最終日には派遣先の方々より「とても助かった、来てくれてありがとう。」と感謝のお言葉を頂き、こんな自分でも被災地支援の一助になれたのだと達成感を感じることができました。

今後の都政に活かせること・活かしたいこと

仕事の進め方や価値観、考え方の異なる他自治体職員の方々と協力して業務に従事した経験は、自身の視野を広げることに繋がり、仕事への取り組み方を見直す良い機会となりました。1か月間と短い期間ではありましたが、災害復旧業務に従事して得られた経験を、今後の都政人生に活かしていきたいと思います。

今回の派遣に当たっては、最上総合支庁の皆様、他県派遣職員の皆様、温かく派遣に送り出してくださった東京都の皆様など多くの人にご支援ご協力を賜りました。慣れない雪国で土地勘の無い中での生活や、初めて災害復旧業務に携わることに不安がありましたが、皆様のご支援のおかげで業務の面でも生活の面でも不安や不便を感じることなく過ごすことができました。この場をお借りして感謝の気持ちをお伝えさせていただきます。本当にありがとうございました。



【最上川 川下り】



【樹氷（山形蔵王）】

第3部 職員派遣（令和6年7月25日からの大雨）

河川・砂防施設の災害復旧等

大内 武尊（建設局／派遣期間：令和7年2月1日～令和7年2月28日）

派遣当初の状況

●職場等

河川砂防課災害支援室の人員は7名（うち4名が県外派遣）である。令和7年2月より東京都及び北海道からの派遣職員が交代した。それ以外は1月から変化なし。職場の様子は下記写真のとおり。

気温は東京と比べ5～10℃程度低い。高頻度で降雪があり、晴天であることは稀であった。



【河川砂防課 災害支援室】

●被災部

下記写真のように、被災部の応急復旧は完了しているが、積雪によりその状況を確認することは困難である。



【被災時】



【仮応急完了時】



【現況】

【被災した門ヶ沢川の状況】

派遣者自身が担当した業務概要

1月から引き続き、災害復旧工事の実施設計の図面数量照査・工事積算・起工書類作成を行った。なお、起工自体は山形県職員が実施する。

基本的には自身が北多摩北部建設事務所で設計担当として普段行っている業務と概ね同様である。

業務の遂行に当たって、苦労したこと、工夫したこと

●苦労したこと

- ・居住地と職場が著しく遠く、20分程度の雪道での徒歩も伴う通勤。自身が寒さに弱いこともあり最も苦労した。
- ・派遣にあたっての事前事後手続きが多く、なかには自費での出費を必要とする手続きもあったこと。
- ・上記事後手続きの例として、後任への引継書・引継ぎシート・活動報告書（本書）・けんせつ局報という類似の資料を4つも作成をしなければならないことが挙げられる。
- ・使用するPCのスペックが低く、業務の円滑な遂行に支障が出ていたこと。

●工夫したこと

- ・設計・積算等において、東京都とは考え方の異なることも多かったが、山形県でのルールに忠実に従い業務を遂行したこと。

印象的なエピソード

- ・積算において、施工パッケージ（S代価）が都よりも充実しており、V代価を作成することが殆どなく積算が容易であったこと。具体的には、護床ブロック（設置・横取り・運搬・撤去など）などが挙げられる。
※S代価（施工代価）、V代価（特殊施工単価）のこと
- ・副産物処理場の選択において、工事座標を入力することで自動的に処理施設を決定できるシステムが構築されており、積算が容易であったこと。

今後の都政に活かせること・活かしたいこと

- ・査定設計書の概要について知ることができたこと。
- ・個人ではなく建設局全体の話としては、前項で記したとおり、積算システム面では山形県と比べ遅れている部分が多く、改善の余地が大いにあることを実感した。

第3部 職員派遣（令和6年7月25日からの大雨）

河川・砂防施設の災害復旧等

岡崎 智也（建設局／派遣期間：令和7年3月1日～令和7年3月31日）

派遣先部署の業務概要（組織の目的・規模・内容等）

【気象概要】

令和6年7月24日から27日にかけて 最上地方と庄内地方で大雨による被害が発生。大雨特別警報（警戒レベル5）が7市町村に、土砂災害警戒情報（警戒レベル4）が19市町村に発表。

降り始めからの降雨量は、酒田市酒田大沢で401mm、鮭川村庭月で470mmを記録。

24時間降水量が6地点、48時間降水量が6地点、72時間降水量が5地点、日降水量が8地点で過去最高値を更新した。

【被害状況】 令和6年9月時点

人的被害：死者3名、軽傷4名

建物被害：全壊20戸、半壊526戸、一部破損2戸、
床上浸水75戸、床下浸水1,156戸（住家）

被害額：山形県1,772箇所、590億円（土木施設）
市町村 344箇所、755億円

査定結果：山形県656箇所
市町村326箇所

【配属された災害支援室の体制】

私の配属された河川砂防課災害支援室は、山形県職員1名、山形県内他事務所から2名、北海道派遣職員1名、宮城県派遣職員2名、東京都1名でした。



【着任時の挨拶（最上総合支庁長）】



【職場風景】

派遣当初の状況

被災箇所は、緊急度が高く、応急復旧部を除いて、河道の一部閉塞や護岸の倒壊などが未対応のまま残っている状況でした。令和6年度では、査定案件数の2割を発注することが目標でしたが、3月の発注を終え、目標を超える3割の発注を達成することができました。



【護岸の倒壊状況（指首野川）】



【護岸の倒壊状況（絵馬河川）】

河川・砂防施設の災害復旧等

派遣者自身が担当した業務概要

12月には災害査定が完了していたため、私の担当は実施設計を行うことでした。最上内川、松橋川の2河川を担当し、測量設計会社から提出された図面及び数量計算書の確認や積算作業を行いました。

業務の遂行に当たって、苦労したこと、工夫したこと

3月の1週目から工事の発注に伴う起工書の持込み日が決まっていたことから、その日に間に合うよう全力で取り組みました。苦労したことですが、起工書に綴る書類において、山形県独自の様式が多数あり作成するのに時間を要しました。さらに、コンクリートブロック積護岸の設計を行ったことがなかったため、設計の考え方を理解するのが大変でした。また、数量の端数処理の仕方や工期の算出方法、土工区分（掘削・床掘り）など積算するにあたって基本的なところが、都の考え方と異なっていたことから、吸収するのが大変でした。ただ、査定が令和6年12月に完了し、1月、2月と順次工事の発注を行っていたことから、参考にできる類似案件があったこと、また災害支援室内で、基準や考え方の統一もできていたので、それを参考にしながら業務を進めることができました。



【災害復旧事業の流れ】

印象的なエピソード（うれしかったこと、やりがいを感じられたこと等）

業務を進めるにあたって、山形県プロパー及び他自治体の派遣職員に温かくサポートをして頂きました。とくに他自治体からの派遣職員は、災害査定を行ったことがある経験者から入庁1、2年目の方など、様々な経歴の方がいらっしゃいました。常に職場は活気にあふれており、分からないことは質問できる、また意見交換がしやすい、とても居心地が良い環境でした。

今後の都政に活かせること・活かしたいこと

今回担当した河川（松橋川、最上内川）は、多摩の建設事務所が管轄しているコンクリートブロック積護岸の設計であったため、多摩の部署で経験を活かせると思います。

東京都における防災、災害対策等に活用できる経験・感想

1か月という短い期間であったため、災害復旧事業における実施設計業務にしか携わることができませんでしたが、自分のこれまで得た設計に関する知識を活かし、被災地で貢献できたことは、自分の自信にも繋がりました。今後も、東京都で災害が起こった際はこの経験を活かすとともに、また機会があれば、他自治体での災害派遣で貢献できればと思っています。

最後に、東京都・山形県の関係者の皆様、このような貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

河川・砂防施設の災害復旧等

山形県最上地域（内陸北部）を所管する最上総合支庁の建設部に配属となり、河川砂防課に新設された最上地域豪雨災害復旧対策室の一員として、地すべり急傾斜地の災害復旧等事業を進めるべく、判断力・行動力・包容力を兼ね備えた室長補佐をチームリーダーとして、頼れる主査とともに設計施工管理を進めている。



【衝撃的な映像だった蔵岡地区】



【被災後間もない写真。枚挙にいとまがない】

派遣当初の状況

山形で車を走らせると（無論例外はあるが）全体に相互協調しているのがすぐに分かる。内陸部は特にその傾向を感じる。先行車に追い付くと、その後追い越すこともなく速度を合わせる。次の車もその次も。綺麗とまでは言えない隊列にもイライラしている様子もない。皆自然体で気持ち良い。ただ、唯一不思議だったのは、豪雪地にしては車間距離をとらない。近い。はて、なぜなのか。

被災箇所はおびただしいほどあるはずなのに、新庄に到着するとどこが被災しているのか分からない。私が思っていたほどではなかったのか。職場に悲壮感はなく、皆ひょうひょうと業務をこなしている。

早速県職員が現場回りを企画してくれ、いざ出発するなり認識は変わった。最上地域の河川は、多くが地表から掘り込まれた形状のため、離れた幹線道路から川の中は見えない。川を覗くとそこら中に土のうが積み、土羽むき出しで、あったはずの護岸はない。最上地域西部の鮭川村は顕著で、そこかしこで土砂崩れ。裏山の倒木が家の屋根にもたれかかっている。南西部の大蔵村では護岸がえぐられ、地すべり対策施設が崩壊、隣接電力施設がピンチ。新たな地すべり箇所はどこかの惑星に降り立ったかの様。なぜ道路・鉄道含めこれだけ被災したのに一般人命被害がなかったのか。

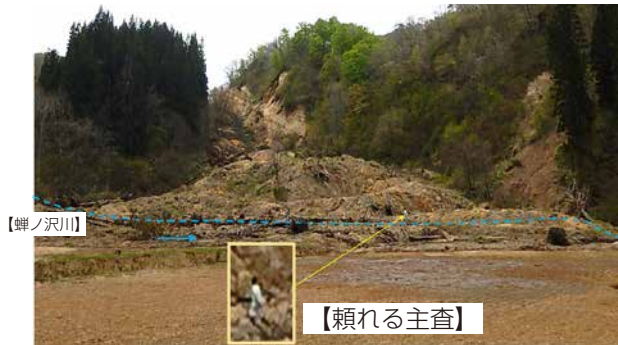
だから被災が軽微だったのではない。被災が甚大であったにも関わらず、失われる危険のあった多くの人命が守られたというのが事実だ。



【鮭川村の川口】

第3部 職員派遣（令和6年7月25日からの大雨）

河川・砂防施設の災害復旧等



【大蔵村小滝の地すべり…どこの惑星に来たのか】

派遣者自身が担当した業務概要

私は鮭川村の小杉地すべり対策事業を任せられ、急傾斜地は優秀な県主査のもとアシスト役。雪解けを待って現状確認となるため、4月時点で地すべり急傾斜地はすべて設計・調査中だった。小杉の地すべりは延長300m、幅100m。中腹から20m程度下方へ押し出され、すべり末端部は5m隆起した。その付近に一級河川曲川があったため、河床を固めていたブロックが、隆起した山上に残る。川の隆起閉塞で、流路は民地の畑を削って付け替わったが、その間、周辺集落は泥水冠水した。

当該事業は、地すべりを抑制するため、危険側の土を取り、押さ込む側に土盛りし、斜面崩落を防止する法枠カバー、土中に潜らん水を吐き出させる井戸、パイプを張り巡らせ、河川洗掘を防止する護岸等の対策に14億円を投じる工事である。

苦労・工夫したこと

赴任時、雪は解けていた。設計は終わってないが現場を動かさねば。前任もそう考えたようで、本体工事の一部工区は概略設計のまま発注されていた。残る工区の発注を急ぐにあたり、室長補佐が外部委託など手回しをしてくれ、おかげで私はずいぶん楽をさせてもらってしまった。

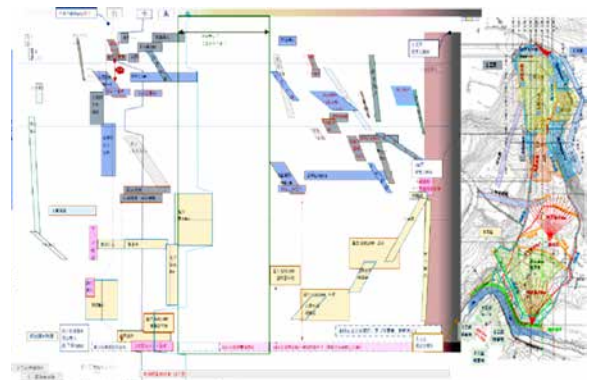
現場を走らせながらの細部設計。これを実行するには受注者との信頼関係が絶対である。彼らも見切り見込みで作業員を集め、資機材を押さえる。設計も現場が必要とする順に作成する。発注者は約束を守り、外力に対しては受注者の前に立ち、動く。土地が必要ならまず発注者が折衝し、内諾を得てから受注者より連絡を入れる。ただし、折衝するには完了までの全体イメージが見えていないと先方の



【倒木を除去し始め、ようやく全容が見えてきた小杉】



【対策中の大蔵村柳洲を襲う護岸崩壊】



【全体工程表は図と工種を同じ高にし、どこで何をしているか分かる。表中央の空白期間は雪で土工不能】

河川・砂防施設の災害復旧等

疑問要求に回答できない。

ということで、事業全体工程表をこちらで作成提示し、各工区受注者と目標を合わせる。できない、手順が違う、何日必要…。ようやくできた全体工程表をもとに各社施工計画を立案する。定期的に関係者一同を集め必要な修正も繰り返す。

一方、確実に履行するためには関係住民の理解が欠かせない。工事で言う“ご理解下さい”とは“ご辛抱下さい”ということ。ならばどんなものができるのか、メリットが感じられるのか分かる資料が必要だろう。そこで、フォトモンタージュを作成することとした。

寝耳に水の隣接土地所有者に会い借地交渉し村道迂回路を作る。地すべり地ではキャタピラのショベルカーでも土没する。伐採木を敷き、根を土と絡ませ前進しては伐採する。緩い斜面でも人は全く登れず、沈む。どこからか集まる水で土はぐちょぐちょ。丸太を土中に刺すと3m4mとスーッと入っていく。進入ルートを川の対岸に切り替える。また土地所有者と交渉。渡河施工を指示する。「安全な状態にして越冬する」。各工区受注者も思いを合わせてくれる。作業員の確保もままならない状況になってきたが、彼らのお陰で、大きな現場とはいえ常時15両を超える重機が一斉に作業をし、目標を達成しようと躍起になっている。こちらも応えねばならない。斜面崩落が止まらないなら買収予定境界を変え、勾配を変え、設計会社も現地入りし、対策を3者で即決。“決して現場を止めさせない”。私の不在時には、室長補佐やいつも私をフォローしてくれる主査が機敏に動いてくれ救われた時もあった。施工中の沈下や変形など今なおトラブル続きだが、誰一人止まろうとはしない。走りながら時の最良と思えることをする。対岸の集落が安心して年越しできる状態までやり切ろう。



【土没ショベルカー、キャリアダンプで救出】

印象的なエピソード（うれしかったこと、やりがいを感じられたこと等）

山形はフルーツ王国、ことサクランボは断トツ。道の駅寒河江ではサクランボの種飛ばし大会を行っており、10m飛ぶと佐藤錦が1パックもらえる。俄然やる気がでる。転がるよう種を乾かし、さあと口に入れ構える。「さあー行きましょう、準備はいいですかー、元気出してー、よーしいーくどー、合図は一、いいかーい、チェリー…。」（やめてくれー、早くしてくれー、種がああ）。

結局べとべとになった種は転がらず9mに届かなかった。

そしてこの懇親会。都と県の私の両上司がともに楽しんでいる。その前、課内では、「わしは週末に里芋を畑からとって飲み屋に持って行く。芋煮を作ってもらおう。」「なら俺はお勧めの辛い酒を持ちこむ、

第3部 職員派遣（令和6年7月25日からの大雨）

河川・砂防施設の災害復旧等

あとブランド米もプレゼントしよう。」
「ではこっちは別の酒を持参するとします。」と皆楽しそう。距離を感じさせない人柄。いや近い。結局懇親は日付変更線を越えて続いていった。しかし芋煮美味かった。

※里芋は休日畑で収穫し、下ごしらえまでして、大バケツ一杯になるほど持ち込んでくれたもの。



今後の都政に活かせるか・どうすれば

鮭川村を例にとれば、避難指示を受け各地区避難を完了していた。川口地区では避難指示より前に区長判断に皆が従い避難した。その川口の山は、遡るだけでも二百数十年崩れた記憶はない。それでも自主避難し、“まさかの”山が崩れ、家を破壊し、道路を塞いだ。

衝撃的な冠水映像が放映された戸沢村の蔵岡地区は、最上川支流からの氾濫に長年苦しめられてきたが、集落全体を堤防で囲む輪中堤が遂に完成し安全性が担保された。…にも関わらず、多くの住民は域外の指定公民館や高台の道の駅へ避難した。そして“まさかの”最上川本流から、水流が堤防を乗り越え集落を冠水させた。失われる危険のあった多くの人命が守られたのは、県・市町村の的確だった避難指示はもとより、住民ら自身による避難行動にあった。

思えば、岩手県沿岸部の高台にある小さな駅前に、風化も進んだ石碑があった。津波について「100回空振りしても101回目も私は逃げる」といった趣旨の戒めが刻まれていた。ここ最上の大蔵村では、昭和49年に一か所の地すべりで17名の命が奪われる悲劇などがあった。平和ボケはしていない。

そんな見事な連携行動を実現させても、それを誇張しようともせず、苦勞があってもひょうひょうとし、あくまで自然体であり続ける地域性、県民性。豪雪地にしては車間距離をとらない。近い。…なんとなく寄り集まってしまう人間性。皆と親しくなる中で合点がいくようになった気がしている。

東京都の防災、災害対策等に活用できる経験・感想

東京の強靱化を進めることは必至である。しかし、立体的都市ゆえ、人口密度が高いゆえ、地盤が脆弱ゆえ、あまりに小さい自治圏ゆえ、様々な文化風土が混在するゆえ複雑な仕組みは機能しないだろう。決め事は単純に。先の蔵岡地区では、指定避難場所へ向かうのを躊躇した方々が少なからずいた。途中の橋梁付近が周辺より低く、冠水しやすかったためだ。色々な“まさかの”を想像し、ハード・ソフトそれぞれに弱点と思われることを一つ一つ取り去っていくことが、“まさかのまさか”が発災した際に、臨機に動ける街、なんとか耐えられる街につながっていくものと信じている。



【栗田最上地域豪雨災害復旧対策室長補佐と…近い】
(筆者は右側)